

ありすの杜きのご南麻布 正垣幸一郎

研修テーマ「スウェーデンにおける認知症グループホームに滞在しボランティアをしながら実際を知る」

海外研修 週間 報告書

第2週目 4/28～5/4

日付	曜日	AM	PM	備考
4/28	日	KPH→ストックホルム	KPH→ストックホルム	移動
29	月	ストックホルム→Visby	Visby→Hattstugan	移動
30	火	Hattstugan	Hattstugan	
5/1	水	National Day のため休み	National Day のため休み	
2	木	Hattstugan	Hattstugan	
3	金	Hattstugan	Hattstugan	
4	土	休み	休み	

<感想>

4/28 コペンハーゲンからストックホルムまで移動

4/29 スtockホルムから Gotland の Visby まで移動。Visby 空港に施設の管理者さんが迎えにきてくれました。その車で宿泊所へ移動。その後、Hattstugan を案内してもらい、買い物をし、彼女の子供を保育所まで迎えに行った。

4/30 朝8時～16時まで Hattstugan にて働きました。

管理者の車に乗せてもらい途中で彼女のお子さんを保育所に預けてから出勤。

到着し着替え終わったらモーニングケアから開始。最初に訪問した方はテレビドラマや音楽関係のディレクターをしていた方だ。お部屋の中は彼がどのように生きて来たのかがわかる一目でわかるものばかりが配置されている。まず最初に目に飛び込んできたのがアコースティックギター、そして、チャップリンの大きなポスター。部屋の飾りは奥さんと娘さんが全て行ったようです。

まず、部屋に入る前に必ずノックをしてはいる。そして起きているかどうかを確認する。目が開いていたので入室し本人起きよう声掛けするもなかなか動けず。無理に起こそうとはしない。そばに管理者が寄り添っていると少し動き始めた。その時点ですかさず朝ごはん、コーヒー飲みに行こうと声をかける、そして、足を下ろすジェスチャーをすると身体を少しずつ動かし始めた。端座位になると靴を履くと同時に洗面所へ案内する。本人のできることは自分でしていただくようにしている。こちらのペースに合わせるのではなくあくまで本人の意思で動き始めることを大切にしているように感じた。居室内のトイレに彼を案内する。プライバシーのこともあるためトイレの外で管理者と二人で待つ。しかし、おそらく自分ではできないので管理者のみが部屋に入り部屋の中で待つ。彼の身支度を済ませた後、リビングへ案内し朝食となる。

リビングに行くと一人の車椅子に座った女性が少し大きな声で話している。彼女はまだ朝食を食べていない。彼女は朝食前にお腹にインスリンの注射を打ってから朝食を食べた。

朝ごはんの内容はトラディショナルなもの。オートミールを炊いたものに牛乳とリンゴのジャムを乗せて食べていた。それに加え、パンにハムやチーズを乗せたオープンサンドにゆで卵、コーヒーかジュースといった感じだ。

入居者に朝食を提供した後はスタッフも同じものを一緒に食べる。

朝ごはんの後に焚き火を川沿いでするための準備をする。最低 66 歳から最高 99 歳までの 10 名の利用者を連れて近くの小川へ車で向かう。10 人乗りのリフト付きマイクロバスをこの施設は持っている。近所の方々や管理者のご家族がスタッフ以外にお手伝いに来ていた。焚き火を見ながら、歌を歌う。ある程度焚き火を見たらお昼ご飯。

お昼ご飯は、ホットドッグ。焚き火を見ている間座っていることができない人は野原を歩き、焚き火を見るのが嫌な人はマイクロバスに残り、さまざまに過ごす。お腹が満たされた後は施設へ戻る。施設へ戻る時もさまざまな方法で戻った。マイクロバスで帰る人もいれば車椅子で帰る人、歩いて帰る人などその人の今の状態に合わせて帰った。バスから降りる際にスタッフが手を差し伸べても降りなかった人は、私が手を差し伸べると私の手を握り降りてきた。この人に好かれたみたいだ。

施設に戻った後は、お部屋で過ごす人、リビングで過ごす人、本当に人それぞれの生活になっている。

おやつはスタッフの手作りアップルパイ。おやつ後少し団欒した後に初日を終了。8 時から 16 時まで働いた。

初日からハードな一日だった。この日はスウェーデン国王の誕生日のようだ。そのため至る所で焚き火をしていたようだ。

5/1 休み

5/2 今日 8 時から出勤。モーニングケアを一人の女性のモーニングケアを行なった。この方は 66 歳でこの施設の一番の若い人。朝食後天気が良かったのでウッドデッキで過ごそうとするもテントが動かない。冬の間使わなかったからか電池が内容だった。電池を買いに近くの Hamse という街に出かける。片道 20 km。車の中で管理者の方は、思い立った時に行動に移すんだ。この施設は自由にやりたいことをする。午前中にできるだけアクティブに動く。買い物の帰りに一緒に行った女性の自宅付近を歩いて帰ってくれた。女性はさほど嬉しそうにはしていなかったが、このように時々でも自宅付近へドライブできるのならさほど嬉しさもないかもしれない。

午後は薬が届いていたのでそれを仕分けする。管理者は看護師だ。この施設に看護師は一人だけ。しかし、基本的な医療ができる資格を持った介護福祉士が数名いる。そのスタッフがインスリンの注射や、配薬をする。その後気になっていたベッドを見せてもらった。臥床している状態から端座位になるまで電動で行うことができるものや電動で座面の高さを変えることができるコマ付きの椅子やポータブルのリフトなどとても便利なものが北欧にはある。デンマークの認知症の施設でみた天井にプロジェクターがついていてテーブルのその映像がプロジェクションマッピングのように映し出されるものも設置されていた。その他には一人用の音楽が流れ、ライトも点くテントのような椅子が設置されている。その場所を好んで利用する人もいる。デンマークの施設で見たベッドのようなものでゆりかごのように揺れるものについては倉庫に置いてあった。プロジェクションマッピングは冬の間外に出ることができないために設置しているようだ。

5/3 今日 管理者ではなく古株のスタッフについてモーニングケアを行なった。管理者とは違ってペースが早い。動きが早いからか少しお年寄りが落ち着かなくなる感じもする。そして、椅子に座らせる時も本人の動きに合わせてというよりも少し強引なところもあった。少しずつ、利用者の名前、居室、がわかるようになってきた。古株のスタッフにはあれを取って、これを取ってなどと指示をいただきここを手伝ってなどと実際の介助をさせていただく事ができた。とても良い経験ができた。トイレの介助も一緒にさせて頂いた。そこでも驚いたのがポータブルトイレだ。日本のように家具調のものではなく機能的だ。シャワーチェアに排泄物を受けるものがついている感じのものだ。とても簡易的だが機能的だ。

この日はお年寄りの問題行動的なものは世界各国同じなんだと感じました。飾ってあるお花を食べってしまった人がいたり、大きな声で「寒い！寒い！」「早く！」「お腹空いた」などと叫ぶ人がいたり、お昼ご飯の後に部屋で寝ていた人が、「おはよう」と言って部屋から出てきたりシャワーを拒否する人がいたり日本と全く同じだ。

違うのはスタッフの対応と人数、排泄ケア、入浴、そして教育のあり方だと感じた。

この日管理者の方に言われたのは、「あなたはそこに座っててくださいね。そうするとお年寄りも座っているから」。まさしく私たちが日本でスタッフに教育しているのと同じことだ。そして、スタッフは座っていることがほとんどだ。一緒にテレビを見ながらコーヒーを飲んで個人やグループでお話をしている。かと思えば部屋でビデオを見ている人もいた。ある程度のスタッフの数がないとやはりここまでの個別的なケアをするのは難しいように感じた。

毎日色んなことを学んでいる。というか今私たちが行っているケアは間違えていないと感じている。時には日本のケアの方が良いところもあるのではないかと感じる。日本の良くないところは政府が介護の担い手のことを考えていないところだ。もっと働く人を大切にできる社会にするべきだと強く感じる。この研修は自国の素晴らしさと他国の素晴らしいところを見比べることができるのがとても良い。ソフト面のケアは日本も全然負けていない。むしろ素晴らしいとも思える。



